

ベルクソン『道徳と宗教の二源泉』の理論構成

— 大小二重の生いのちの弁証法ならびに他者

宮崎 隆

La construction théorique bergsonienne dans *Les deux sources de la morale et de la religion* : les deux grande et petite dialectiques vitales et l'autrui

Takashi MIYAZAKI

ベルクソンの『道徳と宗教の二源泉』（以下『二源泉』と略）を取り上げ、そこに散見される『創造的進化』の記述をも参照しつつ⁽¹⁾、いささか雑駁ながらその全体の理論構成を少し探ってみたい⁽²⁾。その際、試みに「弁証法 dialectique」（cf. DS, 59, 61, 231-4）⁽³⁾の語を用いる。ベルクソン自身の解釈するギリシア思想史ならびにソクラテスの理論から採られたベルクソン独自の弁証法、ある種の「対話術 dialectique」である⁽⁴⁾。『二源泉』が『創造的進化』の諸々の結論を止揚して乗り越える dépasser」（DS, 272, cf. 74, 266）際のその仕方が問題になる。その突破口は那邊にありや。『二源泉』で扱われている二種の「絆関係 société」⁽⁵⁾はいずれも他者関係からなり⁽⁶⁾、「閉じている絆関係〔たる社会〕 la société close」が小さな弁証法の一半を成しているのに対して、「開かれている絆関係 la société ouverte」は、当の小さな弁証法をいわば含む大きな弁証法の到り着く先と解される（243, cf. EC, 239, 285）⁽⁷⁾。三つの「次元 ordre」（cf. DS, 2）⁽⁸⁾を区別するなら、この二つの弁証法のうち前者は、「閉じている絆関係」から成る集団の次元—われわれ脊椎動物にあっては文化の次元—が、知性の次元たる個体の次元—われわれ脊椎動物における生物の次元—を「止揚して乗り越え」んとする際のせめぎ合いであり、今度は後者をもって生物と文化の次元を「乗り越え」て突破したところに生いのちの次元が認められ、さらには純粋な生いのちからなる「開かれている絆関係」が遠望されることだろう。真正の他者はおそらく、この二つの弁証法の狭間に存する。

一、『創造的進化』から『二源泉』へ—原-直観の復権とその伸張

小論の議論の場を確定すべく『二源泉』に記されている次の一節から始めたい。この一節においてベルクソンは、『創造的進化』を念頭に置きつつ『二源泉』の主要な探究の方向を開陳している。

「〔人間以外の〕他の〔生物〕種が、創造する現動力エネルギーによって通りすがりに産み出された—結果 un effet のごとくに生いのち la vie を享けるのに対して、生いのちは人間にあって、いかに不十全でいかに儂いにせよそうした〔創造の〕努力に成功さえしている以上、人間にとっては、他の種にとってと少なくとも同程度に望ましいもの、さらにはなおいっそ

う望ましいものである。してみると、〔生の〕躍動の幾許かでも再始動すべく、躍動の到来してきていたその元の方向へと溯るなら *en remontant, pour reprendre de l'élan, dans la direction d'où l'élan était venu* 人間は、自らに欠けている安らぎ *confiance* を、あるいは反省 *la réflexion* のせいで揺らいだやもしれぬ安らぎを再び見出さぬわけがあるか。それ〔=再始動すべく……溯ること〕は、知性によってなら、いずれにせよ知性のみをもってしてなら為されうべくもない。知性なら、むしろ反対方面 *sens inverse* に赴くことになる。知性の用途は特種であり *elle [= l'intelligence] a une destination spéciale*、知性がそれ相応の諸々の思弁へと高まったとてわれわれは、たかだか様々な可能なものごとを概念的に思い抱く *concevoir des possibilités* にすぎず、知性が何ら本体の実在性に触れることはない *elle [= l'intelligence] ne touche pas une réalité*。しかしわれわれも知っているように、知性のまわりに直観の暈圍 *une frange d'intuition* が、漠として消えかかりつつも残存した。その暈圍を定着させ、強化し *intensifier*、なかんずく補完して現勢化する *la compléter en action* ことはできまいか。なぜそのように言うかといえば、その暈圍がただの視像 *pure vision* と成ってしまったのは、端緒となるその〔当の暈圍たる〕原理 *son principe* の衰弱のせいであり、またこう表現してよければ、当の暈圍に対して実践された捨象のせいだからである」(DS, 224) — 引用A

「生は〔……創造の〕努力に成功さえしている以上〔……〕望ましいものである」。生がすべてを貫く。生-物の「進化発展 *évolution*」についても、生が、その躍動がそれを成就せしめる「原動力 *force*」(DS, 75, 82, 85, *etc.*)である。『二源泉』においては、生が基軸に据えられる。

『二源泉』の復習する『創造的進化』(cf. DS, 21-4, 83-4, 96, 110, 115-126, 213, 216-9, 221-4, 264-7, 313-4) および『物質と記憶』(cf. DS, 274-6, 335-6)によれば、地球上に登場した原初の原-生物(原-動物)は二種の認識機能を、原-直観(原-本能)と原-知性とを不可分なものとしてともに具えており、この両者から混成されていた。いわゆる心身合一である。生-物とはまさしく、生を成す精神的直観と物質性を成す身体的知性ととの合一体である。仮にこうした二元の合一以前を第一階梯とするなら、生物の進化発展の起点たる原-生物(原-動物)は第二階梯に位置づけられる。第二階梯に存する「本源の傾向 *la tendance originelle*」(DS, 314)は一単数定冠詞で示されているように一不可分であった。「諸々の傾向 *les tendances*」なるものは「生の進化発展一般のなかで、二分法の途を通して創り出された *créées par voie de dichotomie*」(DS, 314)のである。そして実践知に向けて進化発展するに依じて、この二元は歪な形態を採る。両者はその方向が反対で対立しているがゆえに、進化発展の線は動物において大きく二手に分かれた。第三階梯である。一方で節足動物はその進化発展に依じて、原-本能(原-直観)をむしろ退化させて、現在地球上に見られるがごとき本能を得た。他方で脊椎動物は原-知性を進化発展させて、知性を得た。ベ

ルクソンによれば、本能による知にせよ知性による知にせよ、第三階梯の知はいずれも実践知である。知性も、思弁機能ではなく、そうではなくて身体的な実践機能——実践意識——なのである (cf. DS, 169, 173, 179, EC, 249, etc.)。そして本能が^{いのち}生に纏わるのに対して、知性は物質性に纏わる。知性という生—物の身体=物質面が物質的なものを認識する。そうした脊椎動物の進化発展の先端に、高等脊椎動物たる「人類 l'humanité」⁽⁹⁾は位置する。第四階梯である。してみると動物に関して二種の区別が考えられる。第一は本能的な節足動物と知性的な脊椎動物との区別である。しかし第二に、動物一般と高等動物たる人類との区別もある。『創造的進化』が第一の区別を中心に展開されたのに対して、引用 A の冒頭は第二の区別に——別の含意もあるが——掉さしている。一方で「他の〔生物〕種」という纏め方によって生物一般が、したがってまた動物一般が指定され、第一の区別は無視されている。『二源泉』において扱われる「本能」とは、われわれ脊椎動物も含めた動物一般の有する「絆関係を宗とする本能 *instinct social*」(DS, 23-4, 27, 95, 125) のことである。「閉じている絆関係」である。他方で人類の特異性について言うなら、人類のみが「反省」する動物である。

「反省」する純粋知性を具えた高等脊椎動物たる人類だけが第四階梯に位置する (DS, 136, 186, 191, etc.)。「人間 l'hommeこそがわれわれの惑星における^{いのち}生の存在理由」(DS, 271, cf. 223) である。生物進化の第三階梯が抜け落ちている。進化を果たした人間を扱うにはそれで十分なのである。ただし純粋知性にしても、その「用途は特種であり、知性がそれ相応の諸々の思弁へと高まったとてわれわれは、たかだか様々な可能なものごとを概念的に思い抱くにすぎ」ない。その「用途」はあくまでも実践向けであり、第三階梯からさらに「高まったとて」、仮に「思弁」と表現したとて、「それ相応の諸々の思弁 *ses spéculations*」にすぎない。第四階梯の純粋知性も、その本質においては相変わらず実践機能である⁽¹⁰⁾。かくして人間は、一つの有機体にも似た諸個体間の関係——「閉じている〔社会的〕絆関係」——を宗とする「潜勢的本能 *instinct virtuel*」(DS, 114, cf. 23, 124) たる潜勢的な直観と個体を宗とする「反省」する知性との混成と規定できる。そのかぎりでは人間は本能と知性との二つの階層から成る。いわば知性を有する蟻である⁽¹¹⁾。ただし、人間の本能(直観)は第二階梯における原-本能(原-直観)のままであって、節足動物のそれのように退化してはいないが。そして「反省」に際してわれわれは「様々な可能なものごと」を、行為する際の複数の選択肢として立てる。われわれ個人たる「諸個体の知性 *les intelligences individuelles*」が立てる「再現表象 *représentation*」である (DS, 108) (「絆関係を宗とする知性 *l'intelligence sociale*」という矛盾を孕んだ表現については後述)。その際、「可能なものごと」には三つの意味が含まれている⁽¹²⁾。その三つの含意それぞれを順次、確認しておこう。

第一に、節足動物の認識対象がおそらく「流動 *flux*」のままであるのとは違って、脊椎動物の知性認識の対象はその行為に応じて「事物 *chose*」と成っている (cf. DS, 37, 57, 134, 182, EC, 249-50)。事物は〈いつ〉〈どこ〉でも同じである。同一のまま限定されて反復する。本質上、幾度でも再現され、「成長増大 *grandir*」(EC, 9, 129, 136, 232, DS, 21, etc.) することはない。本能の認識対象も限定され反復するが、流動であって生きているの

に対して、事物とは死せるものである。第一の区別——節足動物と脊椎動物との区別——に応じる認識対象の特質である。この特質はおそらく、原-知性においてすでに芽生えていたことだろう。音楽におけるアクセント（強拍）のごとくに。知性的動物たるわれわれにあっては、習慣における行為対象——注意を伴うことのない上の空の認識の対象——である。鉛筆で書くという事態を考えてみよう。鉛筆を手にとって紙の上を走らせるというリズムを具えた一連の運動の流れにおいて、鉛筆を握る行為はいわばアクセントとなっている。その際、手に取っている長細い棒たる〈これ〉を、習慣を具えたわれわれの行為する身体なら、「鉛筆」たる事物として認識する。事物とは、行為的認識の対象である。「鉛筆」なるものはいずれも行為において、同じ仕方で扱うことができるからである。手の同じ型に嵌り込んで、書くべく動かすことができる。そうした〈これ〉は個物ではなくて、事物である。手の型が同じなら、長くても短くても、どれも同じく「鉛筆」なる事物である。行為する身体による認識の対象は操作可能なものとして把握される。〈これ〉は可能的な行為対象である。今の場合、手に取っているのが消しゴムなら、それは「消しゴムとして」ではなく、「鉛筆でないものとして」認識される。すでに〈これ〉は脊椎動物たる認識する者「にとって」、当の認識者の行為する身体「にとって」、「～として」事物化され、意味存在となっている。認識論的に相対的な——おそらくは脊椎動物の原-知性による知を発端とする——身体知である。

第二に、われわれ脊椎動物の知性の対象であるかぎり、当の行為対象は思惟による認識の対象でしかない。今度は、行為が未だ成就されていないという意味において、可能的な行為対象である。目の前の〈そこ〉に在る鉛筆を眺め認識することと〈ここ〉に在る鉛筆を手にとって用いていることとは異なる。鉛筆を用いている際、手と鉛筆とは一体になっている。鉛筆を使い慣れた者には、使用中の鉛筆は身体の一部も同然である。〈今〉〈ここ〉において、手と鉛筆との間に隔たりはない。これに対して、眺め認識されている鉛筆は、表象された思惟対象でしかない。〈そこ〉は指差すことができる。認識している私とその対象たる鉛筆との間には隔たりがある。知性の認識対象は、認識している側の知性の〈今〉〈ここ〉にはない。〈そこ〉とは、認識する知性の外部のことであり、知性によって外部化された認識の場のことである。ただし行為の成就する場たる〈そこ〉、行為空間たる〈そこ〉とは仮に固定された〈将来〉の表現にすぎない。当の隔たりは、眼と対象との間の空間的な隔りである以前に、行為に関する時間的な隔りである。そもそも、純粹に空間的な隔りを認識するには、眼と対象との関係そのものを対象とすべく横手に回りこまなければならない。上空飛翔の観点である。その観点において、純粹知性による「反省」が成立する。これに対して時間的な隔りにおいては、われわれ脊椎動物の知性が認識しているのはあくまでも、当の対象のほうである。生ける身体が〈今〉〈ここ〉たる「行為中心 *centre d'action*」(MM, 14, 47, 153, cf. DS, 274, etc.) を成しており、対象はその身体の——鉛筆を将に手に取らんとしている——「身構え *attitude*」(EC, 188, 196-7, 199, DS, 213, etc.) に応じて成立する。時間的な隔りは時間的な可能性であり、認識対象はまず何よりも〈将来に來たらん *à venir*〉としている。行為は〈今〉たる〈ここ〉において準備されており、当の認識対象は手と鉛筆

とが一体に成るはずの〈将来 *avenir*〉たる〈そこ〉なる場に置かれている。身体は鉛筆を將に手に取るべく「待機 *attendre*」(EC, 116, 160-1, 215, 217, 222, 227, 233, 235, 281, 292, 338, DS, 243-4, 338, *etc.*) している。行為する身体が、「待機」することで隔たりを開く。こうした時間的な隔たりを存在論的隔たりと呼んでおこう。われわれ脊椎動物の知性認識は、存在論的隔たりを介して成立する。存在論的に相対的な認識である。

以上に示した二つの相対性を併せ持つ人類——高等脊椎動物であるかぎりでの人類——の認識においては、〈そこ〉に在る可能的な行為対象たる事物は再現された表象——「再現表象」——と成り、複数の事物が選択肢として同時に与えられる。「可能なものごと」の第三の意味であり、第四階梯の発生である。われわれ脊椎動物の認識する〈これ〉は、〈そこ〉に在る〈それ〉と成る。〈それ〉は〈そこ〉に表象された〈これ〉の再現である。〈これ〉がすでに「事物」たる再現であってみれば、当の〈これ〉を〈それ〉として〈そこ〉に再現して表象することは不可能ではない。將に手に取らんとしている「鉛筆」は、当の手の型に応じて〈それ〉として〈そこ〉に再現されているのである。〈今〉〈ここ〉における身構え——雌ネジ——の再現表象——雄ネジ——である。〈そこ〉が〈将来〉なる場である以上、当の〈それ〉が応じている可能的な行為は、未だ成就されておらず、かつ、準備されている。知覚とは「將に生まれんとしている〔身体〕運動の綜体」(DS, 213)であり、行為の準備なのである。〈それ〉は、時間的な隔たりを介して〈そこ〉に在る。〈それ〉は、当の身構えに応じて、予見可能である。われわれは〈それ〉の扱い方をすでに知っている。認識論的かつ存在論的に相対的である。ただしその際、一つの行為対象たる〈それ〉がその都度〈そこ〉に存立するのみである。〈そこ〉が〈将来〉の表現であるかぎり、諸々の〈そこ〉の間には〈ここ〉を「中心」とした遠近の相違がある。行為する際に或る〈そこ〉に至るには別の〈そこ〉を超え行く必要がある。しかるに行為が未だ成就されていない以上、行為からさらに一步、身を引くことは不可能ではない。「それ相応の諸々の思弁」を具えた純粹知性には、〈今〉將に為さんとしている行為の対象ではなくて、単に為しうるにすぎない行為の対象が現れる。「ただの視像」である。そうならば複数の可能な行為対象が同時に存立する。純粹知性はそうした諸対象と対峙している。複数の選択肢である。それとともに今度は、〈将来〉という時間の場を読み替えて仮に固定したにすぎなかった〈そこ〉も複数に成る。或る〈将来〉の表現であったそれぞれの〈そこ〉、或る〈それ〉の存立していたそれぞれの〈そこ〉が、複数の〈それ〉の同時に存立する諸々の〈そこ〉と成る。同時に存立する諸々の〈そこ〉は、もはや〈将来〉たる時間の表現ではない。純粹空間である。諸々の〈そこ〉の間にはもはや遠近はない。そうならば今度は、眼と対象との関係も認識の対象となりうる。〈ここ〉も〈そこ〉に変換される。〈そこ〉と成った〈ここ〉は、そのかぎりで、指差することができる。あるいは〈ここ〉を指差せば、〈ここ〉は〈そこ〉と成る。「反省」による認識である (*cf.* DS, 128)。今度は時間を排除した上空飛翔の観点が成立する (*cf.* EC, 230)。諸々の〈そこ〉の並置から成る諸々の再現表象の場たる空間世界である。われわれ人類たる高等脊椎動物と違って他の動物は——節足動物も脊椎動物も——こうした空間世界など与り知らぬことだろう。「人間

以外の動物は世界を自らに再現して表象したりなどしない il [= un animal autre que l'homme] ne se représente pas le monde 」(DS, 186)。第二の区別に応じる認識の特質である。純粹知性を具えた高等脊椎動物たる人間だけが「反省」を行い、「様々な可能なものを概念的に思い抱く」。第四階梯——純粹知性の認識世界——である。

そして『二源泉』では、知性を否定して乗り越えるべしという否定的な含意において、第二の区別のほうが優先される。「いかなる哲学に与するにせよ、人間というもの l'homme が生ける存在 un être vivant たることを、生の進化発展が、その主たる二つの線上で、絆関係を宗とする生の方向において dans la direction de la vie sociale 成就されてきたことをまさに承認せざるをえない」(DS, 96)と。「生の進化発展」において「主たる二つ線」は、いずれも「絆関係を宗とする生の方向」とみなされ、節足動物と脊椎動物との区別は無視されている。『二源泉』において問題なのはむしろ、一方で両者——本能や習慣 (cf. DS, 48-9) (13)——の認識対象の共通点たる限定と反復だからであり、他方で知性に対する生の、原-直観の伸張だからである。『創造的進化』は「知性のまわりに本能の暈圍が残存している」と指摘するのみであった (DS, 122, cf. 125-6, および引用A)。『二源泉』では、脊椎動物の進化発展のなかで、その端に位置するわれわれ高等脊椎動物において「衰弱」(引用A)し、ついに力尽きて無効化されていた当の裏面——すべての生-物の一方の起源たる生のそのもの——が、「端緒となる原理」(引用A)が、継承すべき「絆関係を宗とする生の方向」として議論の俎上に復活する。「閉じている絆関係」から、さらに「開かれている絆関係」へと向かって。

引用Aに戻ろう。そのように「生の方向」へと帰還するにはまず、生物の次元を含みつつもそれを「止揚して乗り越え」んとする文化の次元——「閉じている絆関係」の次元——において、われわれ高等脊椎動物の有する感性的な直観たる「潜勢的本能」の実効性が試されなければならない。知性と感性とのせめぎ合いが生じている。しかしそれだけではない。『二源泉』においてはさらにまた、その伸張——二元の対立ゆえに、地球上の生物進化においては不可能な原-直観の実効性の伸張——の可能性が生の次元において検討されることになる。「〔潜在力を秘めた動的〕宗教はさらにいっそう遠くへと進み aller beaucoup plus loin うる」(DS, 6)。「開かれている絆関係」へと、である。第二の区別は、今度は知性を間に挟みつつ、「知性以下 infra-intellectuel 」——生物進化の第四階梯に位置するわれわれ脊椎動物も保持している原-直観たる「潜勢的本能」——と「知性以上 supra-intellectuel 」——当のわれわれの原-直観の伸張——という生を基軸とする文脈のうちに置き直される (DS, 41, 63-4, 85, 196, 233, 266)。『二源泉』の全体は——『創造的進化』に新たな階層が一つ加わって——三つの階層から成る三階層構成になっており、第三階層たるこの伸張の到り着く先が「神秘的直観 l'intuition mystique 」(DS, 268, 272-3, 281, 338)である。『二源泉』は『創造的進化』を含みつつも、いっそう広い観点に立つ。実際、第四階梯においては「何ら本体の実在性に触れることはない」のであった。引用Aにおいては、知性は否定的契機にすぎない。

ただし原-直観の伸張に至るには、「潜勢的本能 *instinct virtuel*」が「現勢化 *en action*」される必要がある。そのときにはじめて生は、知性に対抗することができる。知性以下から知性以上の階層に向かって生は知性に対抗すべく現勢化し、原-直観の実効性が復権する (*cf.* DS, 33, 152, 221-2, *etc.*)。直観からなる「暈圀を定着させ、強化し、なかならず補完して現勢化することはできまいか」(*cf.* DS, 265, 272)。「いずれは自分の順番に戻るだろう」(DS, 250)と。文化の次元——「閉じている絆関係」——が試金石である。「推力の残余 *un reste de poussée* が、生の躍動なるもの *un élan vital* が [……] 在る」(DS, 115, *cf.* 97-8)。「本能の暈圀が残存している」以上、われわれにあっては、生は未だ使い果たされてしまったわけではないのである。そうした復権のために『二源泉』においてはまず「本体の実在性」が、そしてまたわれわれに「残存」している原-直観、ほかならぬ生のほうが、生-物を進化発展せしめる「原動力」が議論の俎上に載せられる。この「原動力」は、なるほど進化の第四階梯たるわれわれ高等脊椎動物において「一旦停止 *stationnement*」(DS, 223)、あるいは或る種「一時停止 *station*」(DS, 72-3, 244)した。地球上の生物の進化発展の停止である。しかしそれは生の進化発展の停止ではない⁽¹⁴⁾。その「方向」は、知性の次元においては無効化されていようととも空ではない。そもそも「一旦停止」は、生の進化発展の「道程をわれわれが回顧的 *rétrospectivement* に描く」(DS, 73)がゆえに成立するにすぎない。しかも当の「残存」をわれわれは自ら「知って」もいる。そうした原-直観が、知性には「触れる」ことのない「本体の実在性」をわれわれに開き示してくれる (*cf.* DS, 48)。「触れる」認識、今度は隔たりなき内面の認識、本来の意味での思弁知である。生の次元が開かれる。現在のわれわれ人間の有する直観とは、それ自体においては、地球上に「[生の] 躍動の到来してきていた *l'élan était venu*」その際に出現していた原-生物のその原-直観そのものなのである。生物の進化発展上の第四階梯に位置する現在のわれわれ脊椎動物の原-直観が、生の進化発展上の起源と接続する。だからわれわれ人間には、そうした「到来」の「その元の方向へと溯る」ことができる。生の次元への溯及の「方向」である。これに対して「知性なら、むしろ反対方面に赴くことになる」。「溯る」とは、純粹知性への進化発展の過程をいわば逆行することである。われわれ高等脊椎動物への進化発展と逆の「方向」、原-生物への「方向」であり、「創造する現動力」あるいは「[生の] 躍動」そのものへの一潜勢態にあった原-直観を現勢化し、実効化しつつなされる一帰還である。高等脊椎動物の知性が寄る辺なく並置されている諸対象と対峙している (*cf.* DS, 46) のとは違って、帰還先たる生の内懐には「安らぎ」——何よりももまず、「将来に対する懸念」の解消 (DS, 225)——が見出されることであろう。

しかしそれだけではない。さらにベルクソンは、そうした溯及の継承を語る。「躍動の幾許かでも再始動すべく」と。今度は、われわれの直観の実効性の伸張、生の「再始動」——再開——である。単に帰還するだけではない。われわれに残存している原-直観は、現勢化されることによって「再始動」可能となる。ここに『二源泉』が『創造的進化』の諸々の結論を止揚して乗り越える「突破口」がある。生物の進化発展の起点にあった「生の躍動 *élan*

vital」が「愛の躍動 élan d'amour」と規定し直される。「新たな〔生物〕種の創造 la création d'une espèce nouvelle」(DS, 97, cf. 332, 285) — 再創造 — である。人類を生物としてみなし、進化発展しなかった原-直観に関しては、事実観察に徹していた『創造的進化』(cf. DS, 115-20) に対して、『二源泉』はその変革を模索している。『創造的進化』の開始地点が実質上は、すでに「到来」ずみの地球上の原-生物(原-動物) — 第二階梯の原-直観と原-知性 — であったのに対して、『二源泉』はわれわれに対して原-直観への遡及だけでなく、その現勢化ならびにその伸張を要求する。『二源泉』は、本来の意味での思弁の領野への帰還と当の領野における再創造とを実践する真の実践の書 — 思弁の書 — である。「生の躍動」は、われわれ各自に与えられている生^{いのち}において感知しうる。われわれのうちで自己完結しえないわけではない。これに対して『二源泉』によればわれわれは、『創造的進化』と違って (cf. EC, 246-7)、「確からしいものの領野 le domaine du vraisemblable にいるにすぎない」(DS, 272)。が、しかしそれでも、あるいは、それだからこそ、高等脊椎動物たるわれわれの知性のまわりに残存している「直観の暈囿」を「第一の強化 une première intensification」によって「補完して現勢化する」だけでなく、さらに伸張せしめ、「高次の強化 une intensification supérieure」によって「生一般たる端緒となる原理そのもの le principe même de la vie en général」へと到り着くことはできまいかと (DS, 265…以下の引用K参照)。引用Aに見出される第二の区別のもう一つの含意である。こうした原-直観の実効性の伸張の途は、高等脊椎動物以外にはすでに閉ざされている。では、われわれにおいて、そうした再創造はいかにして可能となるのか。何処に向かって「再始動」するのか。

まとめておこう。二手に分かれた進化発展の線のうち、原-知性のそれはわれわれ高等脊椎動物を産み出した。遡及すべき「方向」に対して、「むしろ反対方面」である。知性的なわれわれ脊椎動物が原-直観を進化発展させることができなかつたのは、知性が感性と、直観と対立するがゆえなのであった。事物化して認識するという知性本来の把握作用 (cf. DS, 134) が「直観の暈囿」までも取り込んでしまった。起源において内面に在った思弁的な「直観の暈囿」たる「端緒となるその〔当の〕原理」は、実践的な知性の外部認識のせいで「衰弱」した。内面への方向に存する「張り緊め tension」に対する「張り緩み détente」という外部化の方向であり、「張り緊め」の否定である⁽¹⁵⁾。そうした外部化に際して、「直観の暈囿」それ自体も脊椎動物の進化発展の方向において、純粹知性の認識対象たる「ただの視像と成ってしまった」。「流動」は「事物」と成ってしまった。「〔潜在力を秘めた〕動的なものを〔硬直した〕静的なものへと変換」(DS, 134) してしまったのである。あるいはむしろ、本来は内面に存する直観は、純粹知性によって反省されるなら、「捨象」されて無に帰する。だからといってまた、遡及すべきは節足動物の本能の方向でもない。「〔原-〕直観は、本能と成るには、格落ちせねばならなかつた」(DS, 264)。退化である。生^{いのち}の進化発展とは逆の方向である。かくして生^{いのち}を進化発展せしめるべきは、知性的なる脊椎動物の方向へでも、本能的なる節足動物の方向へでもない。第三の方向、地球上のこれまでの生物進化の圏外⁽¹⁶⁾の方向である。その方向に在るのが、「開かれている絆関係」であり、「真の神秘説 le vrai

mysticisme」(DS, 225-6, cf. 236, 244, 329, etc.) であろう。『二源泉』の主要な探究の方向である。ベルクソン独自の弁証法の理論構成においてそうした圏外の方角を少し尋ねてみよう。

二、小さな弁証法と大きな弁証法 — 三つの次元の理論的關係

しかるに圏外——「確からしい」にすぎないものの領野——のその在り処に関して、いささか疑義が生じる。なるほどそれは人類が到達した進化発展の方向——知性の方向——にはない。その方向は「行止り」(引用B)である。われわれが求めるべきは、むしろ反対方向なのであった。実際ベルクソンは、第一階梯に存する「生の躍動そのもののうちに身を置き戻すこと」を要求する。

「[人間という生物]種の諸々の性向 les dispositions de l'espèce は不易で、われわれ各人の基底に存続している以上、道徳研究者や絆關係の研究者 [=社会学者] がそれを考慮に入れなくてよいというわけにはゆかない。なるほどたしかに、何よりもまず獲得されたものの下を sous l'acquis、次いで[われわれ自らの]自然本性の下を sous la nature 穿ち、そして生の躍動そのもののうちに身を置き戻すこと se replacer dans l'élan même de la vie に与ったのは少数者にかぎられる。そうした[身を置き戻す]努力がもし[人間という種全体に]一般化しえたなら躍動は、人間という種 l'espèce humaine において、それゆえまた閉じている絆關係 une société close において行止りにおけるがごとくに停止しはしなかったであろう l'élan ne se fût arrêté comme à une impasse。それでもやはり、そうした規格外の人々 ces privilégiés が人間なるもの l'humanité を自らと一緒に引き連れてゆこうと意志していることは真である」(DS, 291) — 引用B

重層的な關係にある三つの次元が示されている。「獲得されたもの」の、閉じている「絆關係における諸々の獲得物 les acquisitions sociales」(DS, 103)の次元、われわれの「自然本性」たる生物の次元(あるいは「自然本性的なもの le naturel」の次元)⁽¹⁶⁾——われわれ高等脊椎動物にあつては知性の次元——、そして「生の躍動」からなる生の次元である。

「獲得されたもの」の次元とは、われわれ脊椎動物にあつては「閉じている絆關係」の次元を、最も表層たる「文化 culture」(cf. DS, 216, 327)の次元を意味している。「文明 civilisation」⁽¹⁷⁾(DS, 9, 303, cf. 81)あるいは「歴史 histoire」(DS, 66, 311, 321, etc.)、「習慣 habitude」の次元のことで、様々な分野が予想される。たとえば「諸々の習俗 mœurs、諸々の制度 institutions、言語 langage」(DS, 24-5, 289, cf. 108, 286)あるいは、「法律 lois」や「しきたり coutume」(DS, 6, 127)、「伝統 tradition」、「慣習 usages」⁽¹⁸⁾、「身振り gesticulation」(DS, 83)といった分野であり、そこにおいて「閉じている絆

関係〔たる社会〕に纏わる知性、自我が成立する (DS, 8-14, 289, cf. 108, 286)。「法的な、さらには道徳的な義務 obligation」(DS, 127)や「〔硬直した〕静的道徳 la morale statique」、 「〔硬直した〕静的宗教 la religion statique」もそこに位置づけられる。そして、こうした「獲得されたもの」を仮に「文化」をもって代表させるなら、文化の次元と生物=知性の次元との連続性が、引用 Aに見出される第二の区別—動物一般と高等動物たる人類との区別—の三つ目の含意である。文化たる「閉じている絆関係」の次元は、「それゆえまた ni par conséquent」(引用 B)という表現からも窺えるように、あくまでも「人間という種」の、純粹知性たる第四階梯の、つまり生物の進化発展のその延長である (DS, 196, 292-307, 313)。なるほどわれわれ高等脊椎動物の位置する第四階梯とは、われわれ個人たる「個体の自我 le moi individuel」(DS, 8-10)が、「諸個体の知性 les intelligences individuelles」が立てる「再現表象」の次元であり、それに対して文化の次元とは、「絆関係を宗とする〔社会的〕自我 le moi social」(DS, 8-10, 65-6)が、「絆関係を宗とする〔社会的〕知性 l'intelligence sociale」が形成する「集合的な様々な再現表象 représentations collectives」(DS, 108)の次元である。「個体 individu」(DS, 7-8, 14, 83, etc.)と「集団 groupe (groupement)」(DS, 27, 55, 99-100, 283, 302, etc.)⁽¹⁹⁾との相違がある。「〔個体たる〕騎手は運ばれるがままにしているだけでよいが、それでもやはり彼は〔集団たる〕鞍に跨らねばならなかった」(DS, 14)。しかしわれわれ高等脊椎動物にあつては、「物理法則 loi physique」・「自然法則 loi de la nature」と「社会的〔絆関係の〕あるいは道徳的法規 loi sociale ou morale」とが、個体的な知性の次元と集団的な文化の次元とが混同されるのも故なきことではない (DS, 129)。実践上はいずれも「指令 un commandement」であり (DS, 4-6)、通常われわれは「必然の感情」(DS, 7)をもって、それに「服従 l'obéissance」(DS, 13, cf. 2)しているからである。われわれ高等脊椎動物にあつては、生物の次元と文化の次元とはいわば地続きであり (cf. DS, 208)⁽²⁰⁾、生物の次元が基礎を成している。生物としての「諸々の性向は不易で、われわれ各人の基底に存続している」。すなわち、意味存在—「意味」であることそのこと—たる〈それ〉を〈そこ〉に再現的に表象しているのがわれわれ高等脊椎動物の生物=知性の次元であるのに対して、文化の次元においては文化ごとに当の〈それ〉の意味内容が規定される。それぞれの意味内容を規定する網の目—意味の相互規定の関係—が異なれば、互いに文化が異なることになる⁽²¹⁾。「集団」が形成される。こうした意味内容は作為的である。それはまた「仮構機能 la fonction fabulatrice」(あるいは「仮構能力 la faculté fabulatrice」)⁽²²⁾が、文化的世界のその意味内容を「偽造」しうる所以でもある。「仮構機能」はそうした「知覚される実在を偽造 contrefaire」(DS, 223)する⁽²³⁾。文化の網の目の一種、「鉛筆」なしの手の型である。〈それ〉なしに「集合的な様々な再現表象」が産み出される。

『創造的進化』に謂うごとく、生-物は生^{いのち}と物質性との二元から成り、われわれ高等脊椎動物は進化発展したその知性に鑑みて、二元のうち的一方たる物質性の側に傾いている。「〔……自然という〕語をもってわれわれが指しているのは、原-物質 la matière brute に

において生^{いのち}の出会い歓待と抵抗の総体 *l'ensemble des complaisance et des résistances*」であり、そうした自然が「製作する知性を宿す身体」を作ったのである (DS, 332-3)。知性は物質向けに出来ている。この限りで、文化の次元も『創造的進化』の射程内にある。これに対して、生物-文化の次元の「下を穿」つなら、生^{いのち}の次元が顕れる。引用Bにおいて、「身を置き戻す」べく要求されているのは、「生^{いのち}の躍動そのもののうちに」である。物質性とは反対方向を成す生^{いのち}である。「生^{いのち}の躍動」たる帰還先であり、「再始動」の起点である。今度はおそらく、脊椎動物という「種の諸々の性向」からさえも解放されることだろう。『二源泉』は生^{いのち}の次元をもって、生物進化の—『創造的進化』の—射程外に、その圏外に立つ。「規格外の人々」、「例外的な様々な人間 *des hommes exceptionnels*」(DS, 29) たる「神秘家」—例外者(以下の引用D参照)—は、「人間なるものをして新たな〔生物〕種たらしめん」(DS, 332) とする。求めるべきは、人類が到達した進化発展の方向とは「反対方面」なのであった。

それでいてしかも引用Bによれば、「再始動」—再開—に期待されているのは、これまでの生物の進化発展の継承でもある。例外者たちの「努力がもし一般化しえたなら」、進化発展の過程で「閉じている絆関係において」人類の陥った「行止りにおけるがごとくに停止しはしなかつたであろう」と。ここに疑義が生じる。われわれにあって「開かれている絆関係」が与えられるのは、「閉じている絆関係」が「開けゆく *s'ouvrir*」結果であろう (cf. DS, 58, 62)。してみると、そうした「開」けは、「行止り」を突破し、知性を超えるにせよ、相変わらず知性の方向に存するとでもいうのだろうか。なるほど、そう解しうる記述が『二源泉』には散見される。たとえば「〔生物〕種を構成しうるあらゆる働きと同様、それ〔=人間という種を構成したその当の働き〕も一つの停止であった。前方への歩みを再始動せんとしても、破碎せんとする決意は破碎されてしまう *En reprenant la marche en avant, on brise la décision de briser*」(DS, 50…引用C) と。脊椎動物の進化の線も人類において「一つの停止」に至った。「再始動」とは、人類の生物進化の「行止り」たる「停止」を「破碎せんとする決意」、つまり生物進化の継承である。しかも今の場合、それ自身が「破碎」されて失敗に帰する。文化の次元である。突破はこの同じ方向に存している。また、「愛の躍動」の「魅力 *attrait*」のうちには、「集団」の「圧力 *coercition*」たる「義務」を「繰り延べ *le prolongement*」てできる何ものか *quelque chose*」⁽²⁴⁾が在る (DS, 98)。あるいは、

「生^{いのち}が停止せざるをえなかつた地点にまで生^{いのち}を導いた息吹の、その当の方向へと明日は途が開け放たれていることだろう」(DS, 333)。まだある。「真の神秘説」もその方向にあって、「発出して物質を貫いた〔地球上の〕精神の潮流 *le courant spirituel*」が、たぶん欲しながらも行き着くことのできなかつた地点に「……」位置している」(DS, 226) と。しかしそれではまるで、引用Aにおいてわれわれに「溯る」べく要求されていた「方向」とは反対方向を指し示しているようではないか。いったい何か起こっているのか。ベルクソンの用意している答えを聴こう。ベルクソンは続けてこう語る。

「なぜそのように言うかといえば、それ [=真の神秘説] にとっては、自然が妥協せざるをえなかった様々な障害など兎戯に等しい *se jouer d'obstacles* からであり、それに他面では、^{いのち}生の進化発展が把握されるのは [……]、^{いのち}生の進化発展とは、大神秘家は到達しているが、到り着きえぬ何ものかの追求だと見て取られる場合に限られるからである。もしすべての人間が、もし多くの人間が、こうした規格外の人間と同じ高みにまで上昇 *monter aussi haut que cet homme privilégié* しえたならば、自然は人間という種のところで停止しはしなかったであろう。なぜそのように言うかといえば、規格外の人間は、本体の実在性に在って、人間というものを凌ぐ *celui-là [=l'homme privilégié] est en réalité plus qu'homme* からである。[……] 真の神秘説が例外的であるのは偶然ではなく、その本質そのものの威力によるのである」(DS, 226) — 引用 D

「真の神秘説」によって今度は、継承される生物の進化発展が、生物の次元が「本体の実在性」の名の下で無効を宣告されている。生物の次元において、われわれ脊椎動物にあつては原-直観が無効化されていた。これに対してまず、当の無効化を無効とする第二の無効化が宣言される。直観の復権、その現勢化である。この地球上の「自然」は、物質性という「様々な障害」と「妥協せざるをえなかった」。ことに脊椎動物の進化発展の線においては、節足動物の進化発展の線と違って、「自然」は物質性の側の進化発展に加担した。知性は物質性に纏わる実践的認識機能なのであった。「真の神秘説」にとってはそうした「障害など兎戯に等しい」。さらには「真の神秘説」は、生物の服している「法則」や文化の一部たる「法規」の「規格外 [=法規外] *privilégié* (特例的な個人 *privus* の法則・法規 *lex*)」であり、「人間というものを凌ぐ」。生物と文化の次元の圏外である。『二源泉』において、「規格外」たる神秘説という対立項が参照先にある場合、「自然」の概念は広義に用いられ、この二つの次元を跨ぐことになる。「規格外」のほうは「超自然的 *supernaturel*」(DS, 39, cf. 55-6) — 「自然を超えた外 *hors de la nature*」(DS, 236) — であり、「知性以上」たる或る種の「情動」(cf. DS, 41, 85, 268) である⁽²⁵⁾。生物と文化という二つの次元と圏外との間には一種の断絶がある。

しかしそれだけではない。現勢化した直観も、この二つの次元と圏外との狭間にあつて、当の圏外を^目差す。^{いのち}生の進化発展も、「大神秘家」なら「到達している [……] 何ものかの追求」である。なるほど、地球上の「精神の潮流」によるかぎり、圏外に「行き着く」ことができず、「追求」は成功しないだろう。しかしながら「^{いのち}生の進化発展が把握されるのは」、当の「^{いのち}生の進化発展が」、成功しないにせよ、「到り着きえぬ何ものかの追求だと見て取られる場合に限られる *ne ... que si on la [=l'évolution de la vie] voit à la recherche de quelque chose d'inaccessible*」。現勢化した直観に対して、「到り着きえぬ」ものとして、「追求」すべきものとして圏外が提示されたのである。「上昇」の方向である。「見て取る」仕方が、全体の構図が転換している。「^{いのち}生の進化発展」を「見て取るべく、^{いのち}生の側が基

軸に据え直される。問題になっている進化発展とは、今や生物の、ではなくて、^{いのち}生のそれである。ベルクソンの提示する地球外（引用E参照）とは、そのための概念装置であろう。その点で今度は、文化の次元においても—「潜勢的本能」をもって「^{いのち}生の進化発展」に与しているかぎり—当の追求が失敗に帰するにせよ、圏外は半ば開かれている。三つの次元の関係が、^{いのち}生の進化発展において問い直されることになる。なるほど、高等脊椎動物たる「人間こそがわれわれの惑星における^{いのち}生の存在理由」なのであった。これに対して^{いのち}生を基軸に据えるならこうなる。すなわち、一般に「様々な世界において」、^{いのち}生たる「精神の潮流」が「発出して物質なるものを貫く」。地球もそうした「様々な世界 *des mondes*」の一つにすぎない（DS, 223, cf. 56, 58, EC, 249）。しかし、偶然この地球上で物質性と一体に成り、生-物という合一体を採用した^{いのち}生は、当の物質性から成る「様々な障害」のせいで、その躍動が阻まれた。「閉じている」ものが「開かれている」ものへと「開けゆく」当のその場で「停止してしまう」ことがある。「躍動が不十分 *une insuffisance d'élan*」（DS, 62）なのである。^{いのち}生の側の原動力の不足にせよ、物質性の側の抵抗が強すぎるにせよ⁽²⁶⁾。しかしそれは「一旦停止」にすぎない。「閉じている絆関係」なるものはかならずしも「自己完結 *se suffire à elle-même*」しておらず、「^{いのち}生の諸々の限定態の一つ *une des déterminations de la vie* にすぎない」（DS, 103）。他の世界、他の惑星においてなら、「物質はそれほど頑強でない *moins réfractaire*」かもしれない。もちろん逆に、当の「潮流が自由な通路を〔……〕不十分な程度においてでさえなく、まったく見出しえない」かもしれない（DS, 223-4, cf. 271-2, 332）。物質性と反対方向の^{いのち}生の「原動力」が「不十分」な

「ここ〔=われわれの惑星たる地球上〕で^{いのち}生の補完者であった物質は、当の〔^{いのち}生の〕躍動を助長するようにはほとんど出来ていなかった。〔……〕それ〔=本源の推進力 *l'impulsion originelle*〕は、当の推進力の要が通過した〔進化の〕線上においてでさえ、ついにその効力 *effet* を使い果たした。あるいはむしろ運動は、直線運動〔*mouvement*〕 *rectiligne* であったのに、円環運動 *mouvement circulaire* に変換された。この線の先端に存する人類は、この円環をぐるぐる回っている *tourner dans ce cercle*」（DS, 272-3）—引用E

生物と文化という二つの次元そのものには突破口はない。^{いのち}生の躍動たる「本源の推進力」は、元来は「直線運動」であったが、この地球上では反対方向の物質性の有する抵抗のせいで「円環運動」へと「変換」されてしまった（cf. DS, 55-6, 144 196）。「潜勢的本能」が文化の次元に「〔浮上し〕現出 *surgir*」（cf. DS, 125）しているのである。そのかぎり、三つの次元は三階層構成に呼応している。文化の次元においては、生物の次元とは違って、外部に向かう知性とは「反対方面」の内面に向かう^{いのち}生たる直観も含まれている（cf. DS, 34）。逆に言うなら、知性のゆえに突破は失敗し、「円環運動」に帰した。力尽きた「本源の推進力」は、生の、ではなくて、生物の進化発展をもたらしたにすぎない。「閉じている魂」、「閉

じている絆関係」(DS, 34, 49)である。

そしてわれわれはこの二種の「運動」——「直線運動」と「円環運動」——のうちに、『二源泉』の理論構成の一環として、『創造的進化』をも含み込んだベルクソン独自の弁証法を見出すことができる。^{いのち}生を基軸とする大小二重の^{いのち}生の弁証法である。まず文化の次元において、小さな弁証法を確認しておこう (cf. DS, 231-4)。単独で見られた生物の次元と比べるなら、それを土台とする文化の次元たる

「魂論上および絆関係上の^{いのち}生の進化発展 *l'évolution de la vie psychologique et sociale* においては、事情は異なる。こちらにおいては、乖離を通して形創られた諸々の傾向は同一の個人において、あるいは同一の絆関係において進化発展する。しかもそれらの傾向は普通 *d'ordinaire*、互いに継起する仕方^{いのち}でしか展開発展しえない *ne peuvent ... se développer que successivement*。大抵は *le plus souvent* そうなるように、もし当の傾向が二つなら以下のごとくなる。すなわち、まず初めに人は両者のうち、なかんずく一方に繋ぎ留められる。そちらの傾向をもって人は、多少とも遠くに、大概はできるかぎり遠くまで進む。次いで人は、こちらの進化発展を通じて収穫したものを携えて、後方に放っておいた傾向を求めて立ち戻る。そうすると今度は、人は前者を今やなおざりにして、後者を展開発展させる [……] と。実働中は、重要なのは当の二つの傾向のうち的一方だけなので人は、全体としてそちらの傾向の下に在る。だから普段は *volontiers*、そちらの傾向だけが肯定的 *positif* であり、他方の傾向は否定 *négation* にすぎないと人は言うだろう。[……] そしてある面では、振子 *balancier* がその出発点に立ち戻るときに、状況はもはや同一ではなくすでに一定の収穫が上がっているなら、方向が逆の両者の間の [振子の] 振動を通して発達進展 *progrès* が為されたわけである」(DS, 314-5) — 引用F

振子運動——「[振子の] 振動」——において、「肯定」と「否定」との弁証法を読み取ることができる。^{いのち}生を基軸にした総合なき弁証法である。「^{いのち}生の進化発展」がまず生物と文化の両次元を貫く⁽²⁷⁾。互いに「反対方面」(引用A)——知性と潜勢的本能——から成る小さな弁証法である。「乖離を通して形創られた諸々の傾向は同一の個人において、あるいは同一の絆関係において進化発展する」。二つの傾向は「互いに継起する仕方」で、交互に「展開発展する」。振子運動における「二つの傾向」とは、基本的には知性と直観(本能)のことだと解される (cf. DS, 2)。その起点は、小論冒頭に引用した「二分法の途」である。「肯定」は、知性にせよ直観にせよその都度、運動している側に、進化発展している側に割り振られる。高等脊椎動物たるわれわれ人間も、「今」は物質性に纏わる知性の側を「肯定」しつつも、生きているかぎり、^{いのち}生に纏わる直観を手放すことはありえない。あくまでも、集団を宗とする直観と個体を宗とする知性との混成における振子運動である。「いずれは自分の順番に戻るだろう」(*op. cit.*) と。その際は、知性のほうが「否定」的契機となる。

これに対して引用Dによれば、「真の神秘説」においては、生物の進化発展が無効を宣告されているのであった。引用Fにおける例外——「普通」ないし「大抵」でない場合——である。直観の現勢化たるこちらの第二の無効化も、「肯定」と「否定」の関係である。しかしながら今度は、^{いのち}生の進化発展は愛の躍動たる「螺旋運動」のうちに組み込まれる。「収穫」を考慮するなら、「振り子の振動 *oscillation pendulaire* のイメージより、螺旋運動 *mouvement en spirale* の形象のほうが〔……〕いっそう適切」(DS, 311) (28)だろう。「人類とは、端緒となる現勢的な運動せしめる原理 *le principe actif, mouvant* の〔その〕一つの終極点における唯一の一旦停止 *stationnement* の表現」(DS, 223)である、と。人類だけが「唯一」、地球上の進化発展の「終極点」に位置しているわけだが、それとてこの「端緒となる原理」による運動のその「一旦停止」にすぎない。原-直観の無効化も一時のことである。原-直観は潜勢態となっているにすぎない。地球上でも、「螺旋運動」——「上昇」(引用D, cf. DS, 67) 運動——の継承は不可能とはかぎらない。全体の方向としては「直線運動」——垂直方向の運動——たる大きな弁証法である。水平方向には知性に対する単なる「反対方面」の運動も、垂直方向においては、^{いのち}生の進化発展の運動の一環たりうる。「われわれは歴史における不可避の宿命など信じない。十分に張り緊められた意志作用には破碎できぬ障害など存在しない」(DS, 312-3)。「愛の躍動」をもってなら。なるほど、「^{いのち}生の進化発展」の「追求」する先たる「真の神秘説」の位置している「地点」——地球上の「精神の潮流が〔……〕行き着くことのできなかつた地点」——は地球上の生物や文化の圏外なのであった。そうした圏外との間には一種の断絶が認められた。「規格外の人間は、本体の実在性に在って、〔地球上の〕人間というものを凌ぐ」。地球上のものならぬ地球外の「自然は人間という種のところで停止しはしなかつたであろう」(引用D)と。しかし別の観点もある。先の引用Cをその文脈の内に置き戻してみよう。

「彼ら〔例外者〕は何よりもまず、自らが感得しているのは自由解放の感情 *un sentiment de libération* であると言う。〔……地球上の〕自然が様々な堅固な絆で、われわれに対して望んだ〔日常〕生活 *la vie* にわれわれを縛り付けるのは間違いだったというわけではない。懸案となっているのは、そうではなくて、いっそう遠くに進む *aller plus loin* ことである。〔……〕このように可動的になった魂が、諸々の他の魂と、さらには自然全体とも共感すること *sympathiser avec les autres âmes, et même avec la nature entière* へといっそう傾くこと、このことは、もし閉じている絆関係の中をぐるぐると円環する *tourner en cercle* 魂の比較的不動なることがまさしく次の事態に起因するのでないなら驚きの的となるかもしれない。すなわち、自然が人間という〔生物〕種を構成したその当の働きそのものによって人間なるものを、区別のつく諸個体に分断したという事態に。〔生物〕種を構成しうるあらゆる働きと同様、それも一つの停止であった。前方への歩みを再始動せんとしても、〔円環を〕破碎せんとする決意は破碎されてしまう。十全な結果を手に入れるためなら、たしかに、爾余の人間たち *le*

reste des hommes を自己とともに引き連れてゆく必要があるだろう。しかしもし幾人かが従い、そしてもし他の諸々も、機会があるなら自分もそうするだろうと確信するなら、それだけでも大したことである。爾来、執行開始の際に、円環はついに突破されることになるという希望が持たれる」(DS, 50) — 引用G

「円環はついに突破されることになる le cercle finira par être rompu 」 — 〈未来〉という新たな観点における「希望 *espérance*」 —。地球上の「自然」よりもさらに「いっそう遠く」へ、である。圏外とは〈未来〉である⁽²⁹⁾。二つの方向 — 水平と垂直 — がある。生物進化において、知性の方向に、いわば水平方向に、「張り緩み」を進化発展させてきたわれわれに今、要求されているのは「上昇」である。そのかぎりでは脊椎動物の生物進化の継承である。しかも一種の断絶がある。三つの次元の関係を考えてみよう。第一に生物進化は現在において高等脊椎動物たるわれわれ人類においてすでに「停止」している。生物の次元における「停止」である。第二にそれを継承した文化の次元においても人類は「比較的不動」な状態に陥っている。「破碎せんとする決意は破碎されてしまう」。「円環運動」である。脊椎動物の知性の進化発展を水平方向に想定するなら、原-直観の進化発展は垂直方向に想定できる。節足動物の本能が原-直観の「格落ち」であるのに対して今、要求されているのは、反対に「上昇」、直観の復権であり、さらにその実効性の伸張である。そうした直観たる生の「前方への歩み」 — 「上昇」 — も、文化の次元においては、知性とのせめぎ合いのなかで、「円環運動」に帰着する。このせめぎ合いは、「押し出し [= 推進] *pression*」たる「推進力 *impulsion*」 — 力尽きた生物の進化発展の作動因 — と「引き入れ [= 希求] *aspiration*」たる「牽引力 *attraction*」とから成り、そこからは、両者の「混合した […] 再現表象 *des représentations* […] *mixtes*」が帰結する (DS, 64, cf. 48-9, 93-4, 98, 144)。「人間という [生物] 種」を — 第四階梯の純粹知性を — 「構成したその当の働き」も「[生物] 種を構成しうるあらゆる働き」も、ともに「一つの停止であった」。もはや — 小論冒頭で引用Aに関して提示した — 第一の区別と第二の区別との区別が成立していない。そもそも、文化の次元に留まる説は、カントの説も含めて、すべてそうした「混合」の変奏でしかないのである (cf. DS, 92-3)⁽³⁰⁾。「絆関係を宗とする知性」とは、人間における一種の形容矛盾 — 集団を宗とする直観 (本能) と個体を宗とする知性という互いに相反する二つの機能を繋いだ形容矛盾、「引き入れ [= 希求]」と作動因とのせめぎ合い — を含んだ表現にほかならない。「知性的と呼びうる本能」、「知性的本能 *instincts intellectuels*」であり、知性による個体化に対する本能の側の「防衛反応」でもある (DS, 168-9)。かくして、小さな弁証法は水平と垂直の両運動から成る。脊椎動物における弁証法である。文化の次元とは、単独で一つの次元を構成しているのではなく、知性的な脊椎動物の生物の次元へと潜勢的な直観が浮上し現出することで成立する混成の次元なのである。

これに対して第三に今、問題になっているはそうした「円環」の「突破」である。ただし「突破」は〈未来〉に置かれている。地球外とは地球上の〈未来〉のことであり、懸案とな

っているのは当の〈未来〉への「開け」である。生物の次元たる第四階梯に、あるいは文化の次元に属する——予見可能な——〈将来〉(DS, 56, cf. 71-4, 145, 147-9, 180)ではない。

〈将来〉は「先取り *anticiper sur*」される(DS, 79)。〈将来〉は既存であり、「先行規定 *prédéterminer* されている」。そのかぎりで、時間は「実効力を欠き *sans efficace*」、作動因と目的因との間に違いがない(DS, 119) (31)。「引き入れ [=希求]」とはそうした目的因ではない。たとえば絆関係の「道徳上の〔心の〕形態変化 *une transformation morale*」

(DS, 103)とは、閉じている絆関係の次元における当の関係の内容変更——意味内容の変更——たる文化の変容ではなく、絆関係自体の「閉じている」ものから「開かれている」ものへの置き換えであり、われわれの現在と〈未来〉とは断絶している。将に來たらんとしている〈将来〉ではなくて、未だ來らざる——しかも定義上、永遠に未だ來らざる——〈未来〉である。ベルクソンならこう言う。「人類の将来 [=未来] はあくまでも未規定・未確定である *l'avenir de l'humanité reste indéterminé*」(DS, 319) (32)と。それどころか、「開かれている絆関係」は「もしかしたら永久に現存することにならない *n'existera peut-être jamais*」(DS, 97)。極北に輝く——「方向 *direction*」(DS, 78)が指し示されているのみで、それ自体は内容不明の、予見不可能な未知なる——理念、「理念たる極限 *une limite idéale*」(DS, 85)である。そうした〈未来〉への方向において、「閉じている絆関係」から成る「円環」の圏外へと「開けゆく」。「円環」からの「自由解放」、大きな弁証法である。

生の躍動たる運動は、生物の次元における脊椎動物——物質の系列——の知性の張り緩みを起点に、文化の次元における知性と原-直観との、張り緩みと張り緊めとのせめぎ合い——小さな弁証法——を経由して、純粋な直観の、生の伸張に到る。第三の生の次元においては、「自由解放の感情」が「感得」されることだろう。内面を経て「創造する現動力」あるいは「〔生の〕躍動」そのものへと帰還することが起点になる。そして「このように可動的になった魂」は、「諸々の他の魂と、さらには自然全体とも共感する」傾性を具える。こうして復権した直観は、生の進化発展、生の「再始動」の方向において、当の圏外を「希求 *aspirer*」し圏外を自差す。「共感(情 *pathos* を共に *syn* する *sym-pathiser*)」とは、他者に「開けゆく」関係である。「愛の躍動」の方向に在る。そのかぎりで、引用Aにおいてベルクソンが記していたように、個体を宗とする知性とは「反対方面」である。また本能的な「集団」のごとくに「閉じて」もいない。いずれの方向にも敵対者が予想され、「安らぎ」(引用A)は見出されえない。目差すは、水平には知性とは反対の方向たる「張り緊め」へ、垂直には本能と反対の方向たる内面の原-直観の伸張へ。生の有している方向——〈将来〉ならぬ〈未来〉——である。

まとめておこう。われわれは『二源泉』において以下のごとき理論構成を見て取ることができる。「自然」が、脊椎動物の進化発展の線において「人間という〔生物〕種を構成したその当の働きそのものによって人間なるものを、区別のつく諸個体 *individualités distinctes* に分断した」(引用G)のであった。脊椎動物にあつては、個体を宗とする第一の生物の次元の方向である。第三の生の次元は第一の生物の次元に対して、「反対方面」で

ある。これに対して、第二の文化の次元も第三の生の次元と同様、「上昇」の試みではあるが、失敗に帰する（cf. DS, 58）。文化の方向は、第一の次元における物質性の「張り緩み」の方向に対して、その反対の直観の「張り緊め」の方向を含んでいるのであった。第二の文化の次元には、潜勢的な直観たる生が現出している。文化の次元はそうした生と物質性との二元から成る。しかし水平方向の「振り子の振動」に終わる。直観たる生は、実効化することなく、物質の次元にいわば飲み込まれてしまう（cf. DS, 331）。「上昇」の失敗による「円環運動」への転換である。小さな弁証法となる。この運動は物質性の抵抗のせいで「習慣」（DS, 1）に帰着することだろう。こちらもやはり生の次元の方向と相容れない。しかし、第一の次元から第二の次元へ、さらに第三の次元へと、「上昇」という方向は継承される。生の目差す「直線運動」——「螺旋運動」——である。「閉じて」いようが「開かれて」いようが、失敗だろうと成功だろうと、第二の次元も第三の次元も、生たる原-直観を起点に、「絆関係」——他者との関係——を目差す。節足動物が原-直観たる原-本能を「格落ち」させたのとは反対方向である。小さな弁証法を含む「螺旋運動」たる大きな弁証法——生のほうを基軸としつつ、生が物質性を「止揚して乗り越えて」生へと帰還し、そして圏外へと向かう弁証法——である。「希望」の先に在るのは、生物進化上取り残された人類の原-直観の——「確からしいものの領野」における——変革であり、〈未来〉における原-直観の実効性の伸張である。

三、「閉じている」ことと「開かれている」こと

— 大小二重の生の弁証法における抵抗の理論と二種の他者

最後に今度は、『二源泉』の理論構成を少し具体的に追ってみよう。元来は「外延を同じくする *coextensif*」（DS, 128）道徳と宗教⁽³³⁾を視野に入れつつも、具体的にはベルクソンの提示する「抵抗」の理論が主題となる。他者問題を導きの糸に、「閉じている」ことと「開かれている」ことそのことについて、それぞれの意味するところをいささかなりとも明確にしてみたい。他者に言及している以下の引用から始めよう。

「われわれ各人は、絆関係にも自己自身にも属している。深層で働いている各人の意識が、いっそう下降するに依じて、ますます独自にして、他者たち *les autres* とは通約不可能で、しかも説明不可能な個人的人格性 *une personnalité* を各人に開き示すなら、われわれ自身の表層を通してわれわれは、他の人々 *les autres personnes* との連続性のなかに在り、他の人々と相似ており、他の人々とわれわれとの間に相互依存を創り出す規律なるもの *une discipline* によって他の人々と一つに結びつけられている。〔しかし〕絆関係に縛られた自己自身のこの部分 *cette partie socialisée* に定位すること、それがわれわれの自我〔＝各人の意識〕 *notre moi* にとって、何か堅固なもの *quelque chose de solide* に自らを繋ぎ留める唯一の手立てなのだろうか。〔なるほど〕もしわれ

われが、他のやり方では衝動、気紛れにして悔恨の生活 *une vie* から身を引くことができないなら、そのとおりであろう。しかしもしわれわれが探求する術を知るなら、われわれ自身の深層の極みにおいておそらくわれわれは、類を異にする均衡 *un équilibre d'un autre genre* を、かの表層的な均衡 *l'équilibre superficiel* よりもさらにいっそう望ましい均衡を発見することだろう。[……] もっとも自己自身の基底に至るまで穿つような努力 *l'effort par lequel on creuserait jusqu'au fond de soi-même* については、[……] それは可能だとしても、例外的 *exceptionnel* であるが」(DS, 7-8) — 引用H

引用Hにおいては、既述の三つの次元と重なりながら、「他者」に纏わる三つの層——表層、深層、最深層——が区別されており、『二源泉』の全体を覆う三階層構成に呼応している。広義の「深層 *profondeur*」は、「われわれ自身の深層の極み *le plus profond de nous-mêmes*」たる最深層——歴史以前の「魂の太古の状態 *l'ancien état d'âme*」(DS, 293)——と単なる「深層」とに区別される (cf. DS, 243, 267)。また単なる「深層」と「表層 *surface*」(あるいは「表層的 *superficiel*」)との間にも (cf. DS, 131-134)、最深層と表層との間にも区別がある (DS, 142, 291)。後者は「[潜在力を秘めた] 動的 *dynamique*」なものと「[硬直した] 静的 *statique*」なものとの区別である (DS, 243, 291, 332)。引用Hにおいては、表層たる文化の次元、深層たる生物=知性の次元、最深層たる^{いのち}生の次元という三つの層=次元が指摘されているわけである。この三つの層を個別に規定するなら、表層は「絆関係に縛られた自己自身の部分」を意味しており、われわれは当の「表層を通して」「絆関係」に属し、「他の人々と一つに結びつけられている」。文化の次元における他者である。「規律なるものによって」他者との間に一種の「均衡」が保たれる (cf. DS, 2, 6)。こちらの「表層的な均衡」とは、集団内の小さな弁証法を意味している。これに対して「各人の意識」の成立する「深層」たる知性の次元においては、「いっそう下降するに応じて、ますます独自にして、他者たちとは通約不可能で、しかも説明不可能な個人的人格性を各人に開き示す。「深層」は個体から成り、しかも程度を許容する。振子運動の途上である。そして理念上は、「他者 *autrui*」を全面的に排した「絶対的自己主義 *l'égoïsme absolu*」(DS, 91)に至る。しかるに今度は当の「深層」に関しても、その「極み」たる最深層においてわれわれは、表層のものとは「類を異にする均衡」を、「高次の均衡 *équilibre supérieur*」(DS, 243)を「発見」しうる。「開かれている絆関係」と「自我」との間の「均衡」と解される。こちらの「均衡」においてわれわれは、他者たる「諸々の他の魂」(引用G)⁽³⁴⁾に開かれて在る。深層を中心に置いて規定するなら、深層が諸個体から成るのに対して、表層も最深層も「絆関係」から成る。二種の他者関係である。深層が知性の次元たるのに対して、表層と最深層は、互いに「類を異にする」とはいえ、ともに「感情 *sentiment*」ないし「情動 *émotion*」の次元である (DS, 7, 40, 243)。ただし生^{いのち}を基軸にした広い観点においては、最深層と他の二つの層との区別が根源的である。それはまた「開かれている」とことと「閉じている」こ

ととの間の断絶でもある。

三つの層の相互関係のうち、個体の次元たる深層と集団の次元たる表層との関係は、文化の次元の内部において見て取ることができる。文化の次元とは、潜勢的な直観と生物の次元の知性との混成なのであった。そして文化の次元においては、当の次元に現出している「潜勢的本能」に対する「知性」の抵抗が、^{いのち}生の側の原動力に対する物質性の側の抵抗が成立しているのであった。実際、「絆関係に縛られ」ているのは、あくまでも「自己自身の部分」である。われわれの「自我」において、「表層」には閉じている絆関係たる〔社会〕面が、「深層」には個人面が在って区別され、かつ連続する。「われわれの自我」は両方の次元に跨っている。「自我」であるかぎりにおいて、「絆関係を宗とする知性」は「個人的自我」の一部であり、そこにおいて他者に面している。表層は深層の一部である。だからベルクソンは『二源泉』の始めから、こうした「表層的な均衡」が存立するかぎり、自我の外に存する「社会〔たる絆関係〕にまで赴く必要はほとんどない」(DS, 8)と宣言していたのである。「絆関係は、その成員たる各自に内在している」(DS, 3)。あるいは「人間の知性は、個体の^{いのち}生と集団の^{いのち}生とを助長するように出来ている」(DS, 56)。「絆関係を宗とする自我」とは、あくまでも「自我」なのである (cf. DS, 65-7)。だからこそ、両者の間のせめぎ合いが発生するわけである。文化の次元は直観たる^{いのち}生の「前方への歩み」——「上昇」——と外部の世界へと向かう知性とのせめぎ合いのなかで、「円環運動」に帰着するのであった。してみると一方で、こちらの他者は当の「個人的自我」と同じ「集団」に属する他者、言ってみれば〈私の他者〉である。他者との間の「絆関係」は「閉じている」。集団を形成する本能——われわれ人間の「潜勢的本能」——の側面である。それゆえ他方で、そうしたせめぎ合いを〈私〉たる当の個体における「量的〔……〕変化 *changements*〔…〕 *quantitatifs*」(DS, 285)と解することができる。混成して文化の次元を成している集団を宗とする本能と個体を宗とする知性とは相互に量的に対立する。深層は程度を許容するのであった。小さな弁証法とは、本能と知性との間の量的弁証法である。文化の次元における他者との間の「閉じている絆関係」は、「〔硬直した〕静的 *statique*」な量をもって規定される⁽³⁵⁾。それに対して大きな弁証法のほうは、三つの次元全体を「上昇」し、最深層たる^{いのち}生の勝利に帰す⁽³⁶⁾。そこには今度は、「質的〔……〕変化 *changements*〔…〕 *qualitatifs*」(*ibid.*)が見出されることだろう。断絶を含んだ質的弁証法であり、「新たな種の創造」(DS, 97, cf. 285, 332)である。非連続で「質的」な弁証法のその「質的」な変換を、「量的」な増減がもたらすことはない (cf. DS, 285)。

「個体の様々な形態変化 *des transformations* が有機界において継起する諸々の種をもたらしたわけだが、それと同様の形態変化が可能となった。爾後、発達進展は新たな質の創造からなることが、もはや単なる〔量的な〕増大成長からなるわけではないということが可能となった。〔発達進展の至った生物ならびに文化の〕その位置で、停止した地点で、単に^{いのち}生の益に与るのとは反対に今や、^{いのち}生の運動を継承 *continuer le*

mouvement vital することになる」(DS, 188) — 引用 I。

さて、『二源泉』において提示される「生^{いのち}の進化発展」は生^{いのち}の側が基軸だとわれわれは解した。その際、量的弁証法において物質性は生^{いのち}に対する抵抗として現れ出る。かの「やすり屑」(cf. DS, 52, 118, 120)の例を思い出そう⁽³⁷⁾。

「[生^{いのち}たる]見えざる手は、一気に[物質性たる]鉄のやすり屑を突き抜けるなら、単に抵抗 *résistance* を斥けるだけのことだが、これに対してこうした行いの現勢態の[側]まさしく単一なること *la simplicité même de cet acte* も、抵抗[しているやすり屑]の側から見るなら、いくらかの量のやすり屑のある特定の秩序を成す並置に見えるだろう。— さて、こうした行いの現勢態について、またそれが出会う抵抗については、何も言えないのだろうか。生^{いのち}が物理生理的また化学的事実に解消しえないとするならば、生^{いのち}はわれわれが日ごろ物質と呼んでいるものに付け加わり、特種な原因の仕方^いで現勢的に作働 *agir* する。この物質は道具であり、しかもそれは障害でもある」(DS, 118) — 引用 J

こうした「抵抗」において、一つの事態を「見る」際の二つの見方が提示されている。生^{いのち}の働きたる「行いの現勢態」は「単一」でも、物質性の「側から見る」なら空間的に「並置」された秩序となる。「外側から見られるなら *vu du dehors*、互いに同調すべく秩序づけられている無限の部分へと解体可能なものも、内側からならおそらくは単一の行いの現勢態として現れ出ることだろう」(DS, 118)。心身関係においては、心を成す生^{いのち}に対して身体という有機体も二義的である。すなわち、われわれが行為せんとするかぎり、「この物質 *cette matière*」たる身体は、一方では行為する身体として生^{いのち}の「道具」であり、生^{いのち}のほうは「行いの現勢態」となって当の身体「に付け加わり、特種な原因の仕方^いで現勢的に作働する」。こちらの身体は、最深層たる内面において感取される生ける身体である。しかし他方では、当の身体は生^{いのち}に対する「抵抗」として「障害」でもある。「われわれが不可分と感取 *sentir* する自分の手の運動も、外部からは *extérieurement* [……] 無数の点の並置として知覚」(DS, 118, cf. 275)される。身体には、〈今〉〈ここ〉に在って運動する私の生ける内面の身体と、外部化されて〈そこ〉に知覚される私の身体との二義がある。後者は、〈そこ〉に存する事物を認識する知性「にとって」の認識対象である。小論冒頭に記したように、前者が隔たりを介してついには、後者と成ったのである。将来たる〈そこ〉に再現表象された〈それ〉—雄ネジ—が知覚される以上、逆に当の〈それ〉に対する行為する身体—雌ネジ—も〈そこ〉に知覚されている。〈そこ〉に在る「鉛筆」は、「鉛筆」をもって手を動かす私の身体自身の再現表象でもある。文化的身体である。こちらの身体はもはや〈今〉〈ここ〉に在る私の生ける身体ではない。「抵抗[しているやすり屑]の側から見」られた、私の生ける身体の「事後的 *après coup*」な再現表象である (cf. DS, 80)。隔たりを開く当の行為す

る身体——それ自体としては最深層の内面において感取される生ける身体——が、そのようにして存立する空間世界における雌ネジたる「抵抗」する表層の身体と成ったのである。ところで「表層的な均衡」が存立するかぎり、自我の外に存する「社会にまで赴く必要はほとんどない」のであった。「個人的自我」の一部たる「絆関係を宗とする自我」も受肉している。同じ「集団」に属する同類の身体——文化的身体——である⁽³⁸⁾。真の他性はない。

しかしながら以上の説明は、『二源泉』に記されているとはいえ、『物質と記憶』および『創造的進化』の復習である。やすり屑の譬えを『二源泉』は、『創造的進化』における「生の躍動」の説明として提示しているが、それは『二源泉』において主に「仮構機能」に関する問いに答えるためである。問いは三つある。第一に「仮構」の「用途」(DS, 111) ないし「役割 rôle」は、その「機能 fonction」は何か。第二に、それは「どこに由来」するのか (DS, 114)。あるいはむしろ「由来」の仕方が問題になる。「仮構機能」はいかにして文化的世界のその意味内容を「偽造」するに至るのか。そして第三に、「宗教は、いかにして自らを誕生せしめた危険 danger の後までが命脈を保ったのか。いかにして宗教は、消滅しないで、端的に形態変化したのか *s'est-elle [=la religion] simplement transformée*」(DS, 115)。第三の問いに対する答えは、なるほどわれわれがすでに確認したように、「生の躍動」の、「推力の残余」ゆえ、となる。しかしそれだけでは、ベルクソンも認めているように十分な答えではない。当の「残余」はいかに働くのか。その実効性はどこまで及ぶのか。最深層と深層との関係を中心に、この三つの問いに対する答えを探ることをもって小論の結びにしたい。

第一にベルクソンに倣って、「蟻が突然、知性的になると仮定してみよう」(DS, 95)。本能をもった節足動物が知性に目覚める。本能——われわれ脊椎動物なら「潜勢的本能」——たる「見えざる手」が知性たる「やすり屑を突き抜ける」。やすり屑のほうは手の運動に「抵抗」する。「知性が何よりもまず勧めることになるのは、自己主義」(DS, 126) である。われわれ高等脊椎動物の個体を宗とする知性は、集団を宗とする「潜勢的本能」に「抵抗」する。その際に「危険」が発生する。なるほど「反省のおかげで、[われわれ] 個体は発明創出し、絆関係は発達進展しうようになる。しかし絆関係が発達進展するためには、絆関係の存続はなおのこと必要である。発明創出のほうは創意を意味する。それで個体の創意に訴えることはすでに、絆関係の規律を危うくする惧れがある」(DS, 126)。「表層」の「規律」(引用H) の危機である。文化の次元に含まれている形容矛盾——「絆関係を宗とする知性」——が小さな弁証法において顕在化する。こうした「危険」に備えるのが「仮構機能」や「義務」の「役割」である。「仮構」の「用途」は「知性の活動の有する或る一定の危険を予防 *parer à certains dangers* せんとする」(DS, 112) ところに存している。「宗教とは、知性の解体する力能に対抗する自然の防衛反応である」(DS, 127)。知性のもたらす個体化の「危険」に対して、今度は「潜勢的本能」の側が対抗する。「集団」における他者との間の「閉じている絆関係」を確保するためである。「[硬直した] 静的宗教の [……] 諸形態は [知性の側の] そうした諸抵抗に対して抵抗する *résister à ces résistances*」(DS, 219)。手の運

動の側もやすり屑に抵抗する。結局は「閉じている絆関係が〔……〕知性の解体作用に抵抗できるのは〔……〕仮構機能から生まれ出る宗教によるほかない」(DS, 284)。「仮構機能」とは、個体を宗とする知性が本能に「抵抗」するがゆえに、さらにそれに対抗する「抵抗」なのである。そうしたなかで「知性以下」なる「潜勢的本能」が現出して、文化の次元が、そうした次元における宗教——閉じている「〔硬直した〕静的宗教」——が発生する。文化の次元は、単独で一つの次元を構成するのではなく、生物=知性の次元へと潜勢的な直観が浮上し現出することで成立する混成の次元なのであった。理論構成においては、『二源泉』はあくまでも三階層構成なのである。道徳的な「義務」もこうした「仮構機能」に類似する。同じ「危険」に備える方途である。なるほど「義務」の場合は、「仮構機能」の場合とは違って、そうした知性の側の「抵抗」に対して「抵抗」するのは「知性」自身である (DS, 95, cf. 13-6)。「義務というものを、或る抵抗によって場合により対抗される準-必然性だと見て取るなら思い抱かれるように、その抵抗は知性に由来し、抵抗に対する抵抗も同じく知性に由来する」。しかし「本質的なものたる〔準-必然性をもたらす〕必然性のほうは〔知性とは〕別起源を有する」(DS, 96)。「事態を復旧し、自分のしたことを解消することに専念する」知性とは、最初の抵抗を行って「本能を邪魔立てした知性」(DS, 95)なのである。「別起源」とは本能のことである。

第二に、こうした「抵抗に対する抵抗」のゆえに、「仮構機能」や「義務」において〈それ〉なしに意味内容が「偽造」される。「潜勢的本能」——「本質的なものたる必然性」——が文化の次元へと現出してくるなら、知性の側の「抵抗」を受けるのであった。その際、「潜勢的本能」と「知性」との混成の仕方が問われる。答えはこうだ。すでに指摘したように、宗教も道徳も、「閉じている」ものであるかぎり、「知覚される実在」の「偽造」である。すなわち、「仮構機能」は知覚作用に類似しながらも、「知覚作用 *perception* でも記憶作用 *mémoire* でもない」。かといって心理学の主張するごとくに「想像作用 *imagination*」だというわけでもない (DS, 111) (39)。「仮構機能」とは、いわば知覚と想像の中間者なのである。「仮構機能」は「集合的な様々な再現表象」を産み出すのであった。「幻のごとき再現表象 *représentations fantasmatiques*」(DS, 111)である。「〔硬直した〕静的宗教」や「〔硬直した〕静的道徳」とは、「潜勢的本能」が物質性の側に外部化した残骸たる「諸々の制度」の一種なのである。手の運動が世界内に残した「無数の点の並置」、「いくらかの量のやすり屑のある特定の秩序を成す並置」である。われわれ高等脊椎動物の知覚が〈そこ〉に〈それ〉——雄ネジ——たる事物を知覚する際は、逆に〈それ〉に対する行為する身体——雌ネジ——が〈そこ〉に知覚されもする。〈そこ〉に在る「鉛筆」は、「鉛筆」をもって手を動かす私の行為する身体の再現表象たる文化的身体でもあるのであった。これに対して「仮構機能」は「まがい物の知覚 *perception illusoire*」(DS, 126-7)を産み出す。われわれの知覚が行為の準備であってみれば、われわれは〈それ〉なしにも「まがい物の知覚」を産み出すことができる。「仮構機能」が産出するのは、〈それ〉なしに〈そこ〉に知覚される事物 (cf. DS, 210, 213) たる意味存在、雄ネジなき雌ネジなのである(40)。その型をやすり屑において空間中に

留めている手の運動のその「事後的」な残骸である。かくして、「仮構機能」は「偽造」された意味内容を、準-再現表象を産み出すことができる。「回顧的」(cf DS, 285)な眺めであり、生に纏わる「潜勢的本能」のその対象化である。〈ここ〉に在った「潜勢的本能」が知性的な実践意識の次元に「上昇」して、〈そこ〉において〈それ〉たる諸事物の関係を獲得した。文化の一種である。「潜勢的本能」が「獲得されたもの」(引用B)の仲間に入れられることになる。「仮構機能」という準-再現表象機能による隔たりの発生が「偽造」をもたらす。知性に対する「抵抗」たる「仮構機能」においても「義務」においても、内面の「肯定的な〔……〕行いの現勢態 *acte ... positif*」たる生の働きが知性の次元へと「否定的に〔……〕表出 *exprimer*」しているのである (DS, 219)。そうした「表出」作用のなかで内面の生が対象化され、「制度」という外部に在る文化的・事物的な意味として現出したのである。こうした対象化が〈そこ〉たる「閉じている」ことそのこと——「閉じている」ものの本質——をもたらす。そうした対象化において、「流動」が〈それ〉たる「事物」的なものとして「偽造」されたのである。存在論的かつ認識論的に絶対であった内面の相対化である。「内面的に感取されている〔生の〕躍動なるものの不可分性」が「外部的に知覚されている〔生の〕躍動なるものの無限の可分性」(DS, 119)へと相対化されたわけである。表層の文化の次元とは、最深層の内面の次元が深層の知性の次元を通過して否定的に「表出」された層にほかならない。かくして、三つの層の相互関係のうち問われるべく残るのは、生物=知性の次元たる深層と生の次元たる最深層との関係である。第三の問いに移ろう。

第三に、生物の進化発展が無効化した後も、「生の躍動」には「残余」があるのであった。当の無効化は生の進化発展の「一旦停止」にすぎないのであった。「生はわれわれが日ごろ物質と呼んでいるものに付け加わり、特種な原因の仕方^{いのち}で現勢的に作働する」。こうした推力の「残余」の及ぶ範囲を測るべく最後に、ベルクソンの提示する弁証法を少し尋ねてみよう。極北の理念——最深層のその極みに在る純粋な生——を体現しているであろう神秘家たる例外者と文化の次元との狭間が、「円環」突破の力量が問題になる。そしてこの力量については、『二源泉』の提示するソクラテスの理論ならびにギリシア思想史が教えられる。両者は劇中劇のごとくに、大小二重の弁証法から成る『二源泉』全体の理論構成を反映している。まずギリシア思想史 (DS, 231-4) のほうから。

ギリシアには「一方は知性的、他方は知性外的 *extra-intellectuel* たる二つの思潮 *les deux courants*」が見られる。オルペウスの思潮とディオニュソスの思潮——二つの「うねり *vague*」——である。一方で後者の思潮は、前者の思潮を巻き込みつつ、大きな「弁証法」のその「大きな運動 *grand mouvement*」を構成する。その「起源」——「潜勢的本能」——には「一種の推進力 *impulsion* が在る」。こちらは「哲学の秩序」には、知性の次元には属しておらず、「神秘的 *mystique*」である。この「推進力」こそが、「ほかならぬ理性外の原動力こそが、理性の展開発展を呼び起こし、そして当の展開発展をその終極へと、理性の彼岸へ *au delà de la raison* と先導した」。そうやって「二つの思潮」から成る運動は「知性以上」たる「神秘説」に至り、「この運動の終極 *le terme du mouvement* が全面的な神

秘説 *un mysticisme complet* 」となることもありえた。「知性外的」な思潮が「知性的」な思潮を「止揚して乗り越える」ことになる。そうなれば、人間という「種に対して、その物質性のゆえに割りふられた諸々の限界を乗り越え franchir 」て、「生^{いのち}の発現たる創造の努力と交渉を持ち、それゆえ部分的に合致する」。大きな弁証法の行き着く先である。知性から知性外へと質的な変化を産み出す質的弁証法である。しかし他方で、オルペウスの「第二のうねり」が「第一のうねり」を無効化する。「第二のうねりは、ピュタゴラス説に、すなわち一つの哲学に至り着く」。なるほどオルペウス教において古典ギリシアの「弁証法は神秘学となって花開く *un épanouissement de la dialectique en mystique* 」。起点は大きな「弁証法」と同じ「その大きな運動の起源」——「潜勢的本能」——である。そこからプラトン主義を経て、今度はプロティノスを代表とする「アレクサンドリアの神秘説 *mysticisme alexandrin* へと〔……〕自ずと開かれる」。しかしたとえばプロティノスが「与ったのは、約束の地を見ることにであって、その土を踏むことにはではない」。「ここ〔古典ギリシア思想〕においては、神秘学と弁証法との間の違いは根元的である」。古典ギリシアの思想は、宗教には到り着かなかった。こうしたギリシアの弁証法的運動の到り着く先に位置するプロティノスといえども、「神秘性を強く浸み込ませて」はいても、「ギリシアの知性主義」たるに変わりはない。外部へ向かう知性である。かくしてこうなる。なるほどギリシアにおいては、「哲学上の〔知性・理性の〕展開発展は、その〔展開発展の〕間に、〔……〕一層多くの神秘性を宿していった」。しかし情動を宗とする「純粹にディオニュソス的な第一のうねり」も「高次の知性性 *intellectualité* 」を有する「オルペウス教のうちに没」する。ストア主義と同じく、「本質的には哲学」(DS, 59) だったのである。「絶対的な意味における神秘説」——「真の神秘説」——ではない。「潜勢的本能」の「推進力」は力尽きる。二元のせめぎ合いからなる文化の次元に留まる。「閉じているもの」と「開かれているもの」との間には、対象性と内面性という断絶がある。直観は潜勢態に留まる。小さな弁証法、量的弁証法である。「発達進展」は「質的」ではなくて、「量的」なものにすぎない (DS, 143)。帰するところ、「知性以下」と「知性以上」との狭間に「観照」たる「知性」が漂う。「現勢的行為 *l'action* も〔……〕観照 *la contemplation* の衰弱」とみなされる。直観と知性との間のせめぎ合いは、知性の側の領野で、〈そこ〉において生じている。せめぎ合いの場は外部に在る。直観は外部化されてしまった。だから、知性の側の、物質性の側の勝利に終わる (cf. DS, 317)。生^{いのち}の側の——内面に存していた——「潜勢的本能」が、現勢化せんとするその途上で、知性の側の「抵抗」に出会い、知性の側に——〈そこ〉という場に——吸収されてしまったのである。逆に、大きな弁証法において「真の神秘説」に到り着くなら、直観の側が、生^{いのち}の側が勝利する。「閉じている」ものから「開かれている」ものに向かって宗教は「形態変化」する。

しかしながら、生^{いのち}に与するソクラテスといえども「真の神秘説」にまで到り着くわけではない。今度は、ベルクソンの化身とも解されるソクラテスを取り上げてみよう (DS, 59-62)。なるほど彼は、ストア主義と違って「情動 *émotion* 」の人である。それは「創造する

情動 *émotion créatrice*」でさえある。ソクラテスの「対話」が「プラトンの弁証法を発生せしめ」、プラトンのアイデア説をはじめとする理性的構築物へと繋がるわけだが、「ソクラテスはなおいっそう遠くに進む」(引用G参照)。「彼の使命は、宗教的で神秘的な秩序に属す」。彼の教えは「見たところ純粋理性を止揚して乗り越える何ものかを拠り所としている」。「いったい誰がソクラテスを閉じている魂の仲間分類しようぞ」。しかしながら実際は、「イエスに反旗を翻していたのはソクラテスであった」。ソクラテスは「直観と靈感を背景に押し返した」。この点では、帰するところプロティノスと違いがない。大きな弁証法に関しては、その理論構成が現実のものとなるのはキリスト教 (DS, 58-9) を、「真の神秘説」を俟たねばならない。しかしまたそれだけならソクラテスの理論も、「知性以下」と「知性以上」との狭間に位置する「観照」にすぎない。オルペウス教と同断である。しかるにベルクソンによれば、変革を目差す「極めて実践的なこの天才」は、「別の社会〔たる絆関係〕のなかに、別の状況のなかに」置かれていたなら、おそらく例外者たりえた。同じ狭間に在ってもソクラテスは、「閉じている」ものが「開かれている」ものへと「開けゆく」その途上に位置し、しかもその「開けゆく魂の眼には、物質的な諸々の障害など崩れ落ちる」(DS, 57)。ソクラテスは、一種の例外者でありながら、同時に例外者ではない。いったい何者なのか。

「いつの日か^{いのち}生の躍動の内面 *l'intérieur de l'élan vital* が、その意義や用途が照らし出される運命にあったなら、光はほかでもなく直観から来たることだろう。なんとなれば、直観は内側に向かったのだから。そしてもしこの直観のおかげでわれわれが、第一の強化 *une première intensification* によって、われわれの内面の^{いのち}生の連続性 *la continuité de notre vie intérieure* を把捉するなら、われわれのうちの大部分がいっそう遠くには進まないにせよ、高次の強化 *une intensification supérieure* によってこの直観は、おそらくわれわれの存在の諸根元にまで、またそこを^{いのち}通って、生一般たる端緒となる原理そのものにまで至らしめられることであろう。神秘的魂は、まさしくこうした規格外〔=法規外〕の特権 *privilège* を持ってはいなかったか」(DS, 265) — 引用K

ソクラテスは途上に留まる。「光」は「直観から来たる」。脊椎動物が進化発展するなかにおいても、その原-直観は内面の思弁知に留まり、「内側に向かった」。当の内面においてわれわれは「^{いのち}生の連続性」を、その持続を把捉する。原-直観は「強化」される。「第一の強化」とは、知性による外部から内面への帰還を意味している。われわれは引用Aに戻ってきた。そうした帰還に際してわれわれは、直観の「暈圍を定着させ、強化し、なかならず補完して現勢化する」。これに対してさらに「高次の強化」によるなら、「^{いのち}生一般たる端緒となる原理そのものにまで至らしめられ、「規格外〔=法規外〕の特権」をもった「神秘的魂」となるであろう。「真の神秘説」への、純粋な^{いのち}生への伸張である。ソクラテはこの「第一の強化」と「高次の強化」の途上に位置を占めている。せめぎ合いから脱出するわけではない。例外

者が第三の^{いのち}生の次元の極限 — 最深層の極みたる純粋な^{いのち}生の極限 — へと旅立ってしまったのに対して、ソクラテスは哲学に踏み留まる。だからといって、ソクラテスはプロティノスではない。同じせめぎ合いでも、プロティノスにおいてはせめぎ合いの場が知性の側に、外部に置かれていたのに対して、ソクラテスは外部から内面に帰還している。それだけではない。その際、内面に踏み留まりつつもその方向は当の内面の「身構え」において、世界へと向かう以前に、むしろ「引き入れ [= 希求] aspiration、直観そして情動」に染まっている (DS, 63)。直観の現勢化、その実効性の復権である。方向は定まっている。例外者へと至る^{途上}、第三階層を「上昇」しつつある^{途上}である。「開かれている絆関係」が「真の神秘説 le vrai mysticisme」 (DS, 225-6) を意味しているなら、ソクラテスはそこへ向かう大きな弁証法のなかに身を置きつつも、その入り口に佇んでいる。

『二源泉』は、ソクラテスに見られるように、神秘説の哲学だと解される (cf. DS, 266, 268-9)。神秘説そのものではなくて、あくまで哲学である。「神性 divinité に充たされた」魂 (DS, 246) ではない。理念に、純粋な^{いのち}生の極限に到達してしまっている神秘説には、むしろ〈未来〉 — 予見不可能で未知なる、永遠に未だ来たらざる〈未来〉 — はない。「真の神秘説」は、「[地球上の] 精神の潮流が、たぶん欲しながらも行き着くことのできなかつた地点に [……] 位置し」 (op. cit.)、到達目標として極北に輝いている。ソクラテスはその「地点」には至らない。地上に留まる。「神秘的絆関係が [……] 将来 [= 未来] において現実になる se réalisera ことは明らかにない」 (DS, 85)。「探求」(引用H)は、「追求」(引用D)はあくまで「探求」「追求」に留まる。ソクラテスにとっても、「到り着きえぬ何ものか」とはまさしく「何ものか」のままである (引用D)。感性と知性とのせめぎ合いから脱しきってはいない。しかし「弛緩と張り緊め」という「二つの逆の方面が、ソクラテスにあっては [相互に] 補完的であった」 (DS, 319)。知性も、その起源たる内面の「弛緩」たる原-知性に還元され、直観と合一体を形成している。すなわち、〈そこ〉に外部化されてしまったオルペウス教とは逆に、当のせめぎ合いは、直観の側の感性の領野において、内面の〈ここ〉において生じている。外部の諸事物から成る世界ではなくて、流動から成る内面たる〈ここ〉である。内面の直観は外部化せんとする知性にあくまで抵抗する。だから、極北の理念を目差す質的弁証法たることができる。しかも〈未来〉に向けて。ソクラテスの「情動」においては、すでに「愛の躍動」は始まっている。ソクラテスはすでに、「新たな [生物] 種」 (ibid.) に属す。方向であるかぎりでの方向において、彼はすでに「圏外」にいる。原-直観の、生の伸張であり、神秘家たちが感取している「愛の躍動」である。「彼らが、自身の内面に流れるままにしたもの、それは彼らを貫いて、他の人々 les autres hommes に達せんと下降してくる流動である。自ら受容したものを自分の周縁に流布させんとする欲求、それを彼らは、愛の躍動として感じ取る」。内面の「まったく新たな情動」 (DS, 102) である。ソクラテスはすでに、大きな弁証法の中に移っている。そうした方向を確保しているかぎり、物質性の側から来る「様々な障害など児戯に等しい」 (引用D)。かくしてわれわれは、ソクラテスの理論をもって、内面における真正の他者への方向を見出す。「愛の躍動」の方向である。

純粹な生^{いのち}の極限において、一つに溶け込んだ生^{いのち}においては、むしろ他者は存立しない。「ただ一つの計り知れぬうねり」(EC, 251) となってしまうだろう⁽⁴¹⁾。それに対してソクラテスにおいては、「開かれている絆関係」と「自我」との間の「均衡」——「高次の均衡」——が見出される。「開けゆく魂」たるソクラテスの感性には「呼びかけ *appel*」(DS, 30, 67, 102, 243, 333, cf. 39, 243, etc.) が聴こえる。そうした「呼びかけの実効性は情動の潜在力に起因する *l'efficacité de l'appel tient à la puissance de l'émotion*」(DS, 85)。「形態変化」した宗教のその「実効性」である。「われわれの魂の基底において、何ものか *quelque chose* がそれに応答する」(DS, 67)。「押し出す」「推進力」に対して、「引き入れる」「牽引力」たる内面の情動であり、しかも同時に他者との共感でもある。世界への方向、またそれゆえ世界内の〈私の他者〉へと向かう「押し出し [= 推進]」の方向ではなく、そうではなくて、「引き入れ [= 希求]」の方向——〈将来〉ならぬ永遠の〈未来〉——、極北の理念たる物質性なき純粹な「〈生〉 *la Vie*」の成立する方向である。「開かれている絆関係」へと到り着くはずのそうした方向に在ってソクラテスは、当の〈生〉^{いのち}一般には到り着かず、複数の生けるものとの間の関係——真正の他者との関係——の成立する〈ここ〉に留まる⁽⁴²⁾。ソクラテスの「魂は、計り知れぬほどに自分以上たりうる存在によって、自らの人格が飲み込まれてしまうことなく *sans que sa personnalité s'y absorbe*、浸透されるがままになっているのを感じ取」している (DS, 224)。〈ここ〉に留まりつつも、〈未来〉たる純粹な生^{いのち}の極限の方向へと絶えず「再始動」——再開——し続ける。未だ来らざる〈未来〉には、〈それ〉だけでなく、〈そこ〉もない。ソクラテスとは〈今〉〈ここ〉に踏み留まりつつ〈未来〉へ向かう、対象なき永遠の運動のことである。

付記 紙数の都合で註はすべて割愛したが、註番号は残した。註は個人的にお配りしたい。